OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ試み
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	臨床哲学. 2019, 20, p. 32-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ試み

浜渦　辰二

はじめに

本日、東アジア哲学会議と題して、中国の広州の中山大学、香港の中文大学、そして、台湾の政治大学および陽明大学から７名の研究者をお招きし、そして、大阪大学臨床哲学より私を含む３名の発表の機会をもつことができて、大変光栄に思います[1]。副題とした「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」というテーマは、私がこの学期、最後の半年間の講義のタイトルであり、また、３月９日に計画している最終講義のタイトルともする予定で、本日は、同じテーマで国際会議を開催して、皆さんに議論していただく機会ができ、大変嬉しく思います。副題にあえて「繋ぐ」とつけているのは、「現象学・臨床哲学・倫理学」というのは、実は、初めから必然的に繋がっているわけではなく、それらをどうしたら繋ぐことができるかを皆さんと議論したいと考えています。私の発表は、実は、３月９日に予定している、私の最終講義のリハーサルともなっていますが、この会議が、これからの日本と中国、ひいては広く東アジアの哲学会議への発展していくことを祈念しつつ、私のこれまでの研究のまとめとしたいと考えています。

１　私の研究背景

私の研究の出発点は、フッサールの間主観性の現象学でした。九州大学で博士課程を終えた後、DAAD（ドイツ学術交流会）の奨学生としてドイツ（旧西ドイツ）に２年間留学しました。ケルン大学のクレスゲス教授、シュトレーカー教授のもとで１年間、ヴッパタール大学のヘルト教授のもとで１年間、学びました。当時、フライブルク大学フッサール文庫の助手のゼップさん、ケルン大学フッサール文庫の助手のローマーさんと知り合うこともできました。帰国後、博士論文『フッサール間主観性の現象学』（創文社、1995）を刊行し、さら

に、フッサールの『デカルト的省察』の翻訳（岩波文庫、2000）を刊行することができました。

1991 年に静岡大学に助教授として着任し、フッサール研究を続けると同時に、2001 年に義父を膵臓がんで亡くしたことがきっかけになって、（広い意味での）ケアの問題に取り組み始めました。最初は、ターミナルケアの問題でしたが、その後、義母がアルツハイマー型の認知症、実母が脳血管性の認知症となり、高齢者ケアの問題にも関心をもつようになりました。当時、大学での教育・研究のほか、たまたま知り合った精神科医の先生たちと「臨床と哲学の会」を始めるとともに、当時非常勤講師を務めていた看護学校の先生たちと「ケアの人間学」合同研究会も始め、編著『〈ケアの人間学〉入門』（知泉書館、2005）を刊行しました。

それと並行して、海外の現象学研究者たちとの交流も始まりました。日本学術振興会の科学研究費に基づく共同研究により、多くの現象学研究者を海外から招待することができました。例えば、ナミン・リー（韓国）、リャンカン・ニー（中国）、ホーレンシュタイン（スイス）、ザハヴィ（デンマーク）、スタインボック（米国）、バリー・スミス（米国）、トム・ネノン（米国）、ブレッヒャ（チェコ）、らです。また、O.P.O.（世界現象学連合）、P.E.A.C.E.（東アジア現象学会）、韓国現象学会、北欧現象学会にも自ら参加し発表する機会を得ました [2]。そこでも、フヴァティク、エンブレ―、マルタン、クゥクイン・ラウ、サラ・ヘイナマー、マルシア・シューバック、といった研究者達と知り合うことができました。

このように私が間主観性の現象学とともにケア論を研究しているということもあって、ちょうど 10 年前の 2008 年に、大阪大学の「臨床哲学」研究室に招かれ着任しました。大阪大学では連続講義「ケアの臨床哲学」を続けるとともに、学外での社会連携活動の一環として、専門職・研究者とともに一般市民も一緒に対話をする「超高齢社会のなかで考える」というシリーズのシンポジウムを、８年間で 20 回を超えて企画・運営してきました。

2009 年から 2016 年まで、「北欧ケア（北欧諸国におけるケア）の思想的基盤を掘り起こす」という、国際的な共同研究、と同時に看護学、リハビリ学、社会福祉学、特殊教育学、文化人類学、音楽療法学、死生学、哲学といった異な

る分野の研究者たちのともに学際的な共同研究を行いました。この共同研究のなかで、北欧諸国を数回訪れ、多くの現象学者（カーリン・ダールベリ、フォークマーソン・シェル）とも出会うことができました。この共同研究に基づく編著『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』（大阪大学出版会、2018）を編集して、まもなく出版する予定です。

近年、山口一郎教授との共同監訳により、フッサールの『間主観性の現象学』全三巻の日本語訳を刊行しました（ちくま学芸文庫、2012, 2013, 2015）。これまでフッサール現象学とケアの臨床哲学に平行して取り組んできましたが、この数年は、両者の間を架橋する試みに取り組み、ケア論への関心からフッサール現象学を見直す作業もしてきましたそして、このテーマに関して、東アジア圏でも数回、英語で発表をする機会がありました。

２　現象学と臨床哲学

日本には、二つの臨床哲学の流れがあります。一つは、精神病理学者・木村敏が、1993 年頃から、精神科医としての臨床の現場から哲学することを「臨床哲学」と呼んだもので、2003 年から年 1 回、精神科医と哲学者との対話の場である「河合臨床哲学シンポジウム」を継続し、自らの研究史を「精神医学から臨床哲学へ」と特徴づけています。もう一つは、大阪大学で哲学者・鷲田清一と中岡成文が、1997 年から臨床哲学研究会を立ち上げ、1998 年から、倫理学研究室からの改称により臨床哲学研究室が誕生し、それから 10 年後（今から 10 年前）の 2008 年に私が着任した、大阪大学の臨床哲学です。今日は前者については触れる余裕がありませんので[3]、後者のみを紹介します。

大阪大学の臨床哲学研究室では、哲学のテキストだけではなく、社会学、心理学、文化人類学、言語学、経済学、医学、等々といった異なる分野のテキストを使うことも歓迎しています。さらに、テキスト（文献）研究のみならず、他の分野の理論家、実践家、あるいは一般市民らとの対話・討議を通じた研究も推奨しています。また、教室、研究室、図書館にとどまるのではなく、病院、学校、街角などを訪れ、そこで対話をすることも大切にしています。この意味で臨床哲学を、分かりやすく言えば、「実践的哲学」とか「フィールドワーク哲

学」とも呼ぶことができるでしょう。

また、臨床哲学は、大学外に活動の場を広げることで、大学内のアカデミズムを掘り崩そうとしているとも言えます。それは大学で教えられている哲学に疑問を投げかけ、教室を離れて、病院や、学校や、街頭といった、社会の現場に出ていくことを呼びかけています。それはちょうど、ソフィストたちと対話をするためにアゴラ（市場）に出かけていって哲学をしたソクラテスに倣ったものでもあります。「ソクラティック・ダイアローグ」も一つの手法とされています。そうした現場では、専門家と非専門家の違いが役立たなくなるような対話の重要さを強調しています。

例えば、「哲学カフェ」という形での対話の場を開き、そこではすべての参加者がそれぞれの立場から発言し、すべての発言が聞き取られ、真剣に受け止められるべきと考えています。そこでは、結論や合意が見つかるとは限りません。「私の言葉もあなたの言葉も、対話のなかからのみ生まれる」と考えています。現象学者メルロ=ポンティが言うように、「私たちは私たちの誰から始まったのでもない共同作業に巻き込まれ、そこでは私の思想とあなたの思想は絡み合って、一つの織物を織ることになる」のです。私たちの活動には、ほかにも、同様の性格をもったものとして、「子どものための哲学（P4C）」や「市民のための公開シンポジウム」なども行われています。

こうした臨床哲学の活動のなかで、私自身は、前述のように、一方では「市民のための公開シンポジウム」と、他方では「異なる分野の研究者との学際的研究」を行ってきました。前者については、「ケアの臨床哲学」研究会として、「超高齢社会」におけるさまざまな問題について年間３～４回の連続公開シンポジウムを行い、そこでは非専門家を含めてさまざまな立場にいる人たちがともに対話をする機会を設けてきました。後者については、「北欧ケア」についての学際的かつ国際的な共同研究を行い、そこからまもなく私が編集した論文集が刊行予定です。「ケアの臨床哲学」と「北欧ケア」の私の活動においては、フッサールの間主観性の現象学が重要な役割を果たしている、と私は考えています。私は、そこに現象学と臨床哲学の繋がりを見出そうとしているのです。

フッサールの間主観性の現象学によれば、私たちは、「原初的（primordial）あるいは自我論的（egological）な次元」から、「他者経験（Fremderfahrung）」を通

じて、世界を共有する「間主観的（intersubjective）な次元」に至ることになります。フッサール自身は、「私と他者」の区別を論じていますが、私見によれば、「ケア」の問題を考えていくと、「他者」のうちには、「二人称の他者」（親密な他者）と「三人称の他者（疎遠な他者）」を区別しなければならないように思われます。

フッサール自身は、「二人称の他者」（親密な他者）と「三人称の他者（疎遠な他者）」を区別してはいませんが、発生的現象学という枠組みのなかで、「異性への性衝動」や「乳児の母子関係」や「身近な家族の死」（次男を第一次大戦で亡くしている）について論じている箇所があります。私自身は、「ケアの臨床哲学」において「生老病死」（仏教の「四苦」）を、なかでも「死」の問題を考えるなかで、フッサールがはっきり区別することのなかった「二人称の他者」（親密な他者）と「三人称の他者（疎遠な他者）」を区別して考えるべきではないか、と思うようになったのです。

フッサールは、そこから世界経験が広がっていく出発点としての一人称パースペクティヴの重要さを強調しています。私たちはいつもすでに間主観的な世界に自然に生きているからこそ、私たちはこの一人称パースペクティヴという出発点に戻って考える必要があるというのです。しかし、これは最初の（原初的な）次元でしかなく、私たちはそこにとどまることはできません。私のパースペクティヴには還元できない、他のパースペクティヴをもつ他者を発見することになり、しかもそこにはフッサールが区別することのなかった、二人称パースペクティヴと三人称パースペクティヴが区別されるのです。このように異なるパースペクティヴを経験することによって、私たちは世界の間主観的な性格を発見することになります。

臨床哲学にとって、この一人称、二人称、三人称というそれぞれのパースペクティヴの差異とそれらの間に合意を探し求めることは重要な論点になります。臨床哲学の出発点も、私自身ないし当事者の一人称パースペクティヴですが、次のステップにおいて、対話における二人称パースペクティヴが必要となり、それが一人称パースペクティヴを創造的にしてくれるのです。さらに、私とあなたの間の対話を公共のものに拓くためには、私たちは三人称パースペクティヴを取り込み、世界の間主観的次元に進む必要があります。このようなパース

ペクティヴの差異とそれを克服する合意こそ、倫理学の問題に繋がるものでした。

３　現象学と倫理学

日本の倫理学者・和辻哲郎『人間の学としての倫理学』による倫理学の考え方によると、倫理学とは「倫（ともがら、なかま)、すなわち、ひととひとの間の理（ことわり、すじみち)」なのです。それは、倫理学とはそもそも自由で自立して自己決定のできる単独の個人（人格）に関わる問題ではない、ということを意味します。そうではなく、倫理学とは、初めから関係のうちにともに生き、互いに依存し合っている人間存在に関わる問題である、ということを意味しているのです。

この意味で、倫理学は初めから、個人主義的・自我論的な次元ではなく、間主観的な次元に属する事柄なのです。しかし、この間主観的な次元とは、一人称、二人称、三人称という次元の違いが消え去るような普遍的な次元のことではありません。まさにこの三つの次元の差異が重要な案件であり、それは普遍的な規則を探求する倫理学においてはしばしば見逃されてしまうのです。

先に述べたとおり､私は現象学とケア論との間を架橋しようとしてきました。まさにそのようなケアの現象学という場面において、一人称、二人称、三人称というそれぞれのパースペクティヴの違いを通じて倫理学の間主観性を見出すことができると考えるのです。この違いの重要さは、前述のように、死に行く人のケアという場面において際立って来ます。私は､「脳死後の臓器移植」の問題と「終末期における意思決定」の問題において、この案件を議論してきました。

ウラジミール・ジャンケルヴィッチ（1903-1985）は､『死』（1966）という作品のなかで､「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」を区別しました。例えば、或る人が死にゆくとき、この人の死は、死に行く本人にとっては「一人称の死」とされ、その人の家族ないし親密な関係にある人にとっては「二人称の死」とされ、その人をケアする医療・ケアの従事者にとっては「三人称の死」とされます。たとえ、医療・ケアの従事者が死にゆく人やその家族ないし親密

な関係にある人と人間的な関係をもっていたとしても、彼らは二人称になることはできず、せいぜい二・五人称（柳田邦男）にしかなることはできません。

そのように死にゆく人の場合、この死にゆく人の死は、一人称、二人称、三人称それぞれのパースペクティヴにとって異なる仕方で現れています。この場合もっとも重要なことは、それらの異なるパースペクティヴがどのようにして三方向の対話のなかで合意を見出すことができるか、ということです。合意を見出すプロセスは、単純な短い時間での「インフォームド・コンセント」によってではなく、三つの異なるパースペクティヴの間で一歩一歩対話を積み重ねることによって描かれるべきだと、私は考えています[4]。

医療倫理学ないし臨床倫理学においてはしばしば、或る普遍的な規則が個々の場面にどのように応用されるかとか、いくつかの原理のうちどれがそれぞれの場面で優位に置かれるべきか、とかいったことが論じられています。しかし、私見によれば、これらの倫理学においてもっとも重要な問題は、三つの異なるパースペクティヴの差異とズレにあり、これら倫理学のほとんどの問題は、このパースペクティヴの違いから生じるのです。こういうわけで、間主観性の現象学は、私見によれば、医療倫理学や臨床倫理学において重要な役割を演ずることができるのです。

おわりに

これまでの私の研究において、私は、本日お話ししたことについて、さまざまな機会に議論をし、日本語だけでなく、英語やドイツ語でもいくつかの論文を発表してきました。今年３月に退職するにあたって、私はこれまでさまざまな雑誌や学術誌で発表してきた論文がばらばらにならないように集めたいと思っています。日本語で書いてきたものの論文集は、日本の出版社から出版し[5]、それとは別に、英語やドイツ語で書いてきたものについては、大学の『文学研究科紀要』のモノグラフ編として出版する予定です[6]。私は退職したのちにもほそぼそと研究を続けたいと考えていますが、海外の研究者たちとの共同研究の機会は少なくならざるをえないと思います[7]。その意味で、本日、このような東アジア哲学会議という場をもうけることができ、お話しする機会を得られたこ

とを大変感謝しています。

ご清聴ありがとうございました

注

1. 平成 29 年度大阪大学国際合同会議助成の援助を受けて、主催：大阪大学臨床哲学・倫理学研究室、共済：中国・広州中山大学、香港・中文大学、台湾・政治大学、台湾・陽明大学および科研費共同研究「傷つきやすさと有限性の現象学」により、2018 年 1 月 29 日（月）、大阪大学会館アセンブリーホールにて、東アジア哲学会議「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」が開催された。本稿はそこでの発表原稿を、発表の時のスタイルのままに掲載するものである。後述のように、この発表および発表後の質疑応答を踏まえたうえでほぼ同じタイトル「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」で、同年 3 月 9 日（金）、豊中総合学館 301 講義室にて最終講義が行われた。その原稿は、まもなく拙著『ケアの臨床哲学への道―生老病死とともに生きる―』の「終章」として収録される予定である。本稿では、できるだけ最初のアイデアを披露した原型をとどめる形で公開することにしたため、タイトルには「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ試み」と「試み」を残している。なお、会議のポスターに掲載した「会議の趣旨」と「プログラム」は次の通りであった。

   【会議の趣旨】現代哲学の一大潮流となっている現象学は、誕生の地ドイツから始まって、20 世紀にはフランス、アメリカ、イギリス、日本へ広がったが、21 世紀に入って、北欧現象学会により北欧諸国に、東アジア現象学サークルによって東アジア諸国に広がっている。2004 年に創設された東アジア現象学サークルは、日本、中国、台湾、香港、韓国の各地区で 2 年おきに開催され、2016 年 12 月第 7 回が東京大学で開催された。そこに集まる現象学研究者同士の交流も、現象学を超えてさまざまな分野で広がってきている。そこで、今回は、現象学とともに臨床哲学と倫理学を研究している大阪大学の臨床哲学研究室が中心となり、上記の交流のなかで関心を共有する研究者を中山大学(中国)、政治大学・陽明大学(台湾)、香港中文大学(香港)から招いて、「現象学・離床哲学・倫理学を繋ぐ」という東アジア哲学会議を開催することとなった。

   【共催】中国・広州中山大学、香港・中文大学、台湾・政治大学、陽明大学、科研費共同研究 「傷つきやすさと有限性の現象学」
   【主催】大阪大学臨床哲学・倫理学研究室

   2018.1.29（月）9:00-18:00 於：大阪大学会館アセンブリー・ホール

   午前の部 [09:00-09:10]
   開会式 挨拶：浜渦辰二(大阪大学)
   研究発表(1)、司会者・通訳者：張政遠(香港中文大学)、討論者：汪文聖(政治大学)
   [09:10-10:00] 廖欽彬(広州中山大学)：京都学派と臨床哲学―木村敏を手掛かりに―
   [10:00-10:50] 林遠澤(政治大学)：精神保健看護におけるリカバリーモデルの構築と基礎づけ
   休憩 10 分
   司会者・通訳者：廖欽彬(広州中山大学)、討論者：林鎮国(政治大学)
   [11:00:11:50] 浜渦辰二(大阪大学)：現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ試み
   昼食 90 分
   午後の部
   研究発表(2)、司会者・通訳者：張政遠(香港中文大学)、討論者：李樺(広州中山大学)
   [13:20-14:10] 汪文聖(政治大学)：ナラティブセラピーの論理の探究
   [14:10-15:00] 許樹珍(陽明大学)：精神病患者の家庭におけるケアの時間の現象の探究

休憩 10 分
司会者・通訳者：廖欽彬(広州中山大学)、討論者：林遠澤(政治大学)
[15:10-16:00] 川崎唯史(国立循環器病研究センター)：傷つきやすさの概念─臨床研究の倫理とフランス現象学を繋ぐ─
[16:00-16:50] 本間直樹(大阪大学)：臨床哲学とフェミニズム
休憩 10 分
[17:00-17:50] ディスカション、司会者 : 堀江剛(大阪大学) 通訳者:張政遠(香港中文大学)、廖欽彬(広州中山大学)、参加者全員
[17:50-18:00] 閉会式、挨拶：汪文聖(政治大学)、通訳者：張政遠(香港中文大学)、廖欽彬(広州中山大学)

なお、当日は、ちょうど平成 29 年度大阪大学国際共同研究促進プログラム（短期人件費支援）の援助を受けて、研究題目「死生学と臨床哲学─日中比較研究─」のため、1 月 4 日から 3 月 2 日まで大阪大学に滞在していた徐静文（北京城市学院・講師）も参加した。

2. 今回、この会議に中国語圏から招待した研究者のほとんどは、こうした機会に知り合って交流を始めた方々である。
3. 前者つまり木村敏の臨床哲学については、私の前に発表のあった廖欽彬「京都学派と臨床哲学─木村敏を手掛かりに─」を参照されたい。
4. 一人称・二人称・三人称という三つの人称という枠組みが適切かどうかについては討論の場で疑義が出され、筆者も可能な限りで応答しておいた。まず一つに、これがあくまで西洋近代語の文法をもとにした枠組みでしかなく、それを東アジアにおける私たちの議論としてそのまま採用できるかどうかで、これはまさに東アジア哲学会議として議論に値することだろう。二つ目に、一方でこれら三つの人称の手前ないし根底に未分化のゼロ人称とでもよぶべき次元があるのではないか（西田幾多郎の議論を考慮する必要があろう）、他方で逆に三つの人称の向こうにないしそれらを超越した四人称とでも呼ぶべき次元があるのではないか、といった疑義である。筆者としてはとりあえず、理論的・哲学的な議論としてはありうる議論ではあるが、医療・看護・介護・福祉といった現場の方々との議論では、とりあえず三つの人称で語るのが分かりやすいので、そういう議論を展開している。しかし、ゼロ人称や四人称についても考察する意義はあるだろう。以上の議論については、まだまだこれから考察を深めたいと考えている。
5. その後、拙著『可能性としてのフッサール現象学─他者とともに生きるために─』（晃洋書房、2018）として刊行された。
6. その後、*On Development from Husserl's phenomenology - Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring -* （大阪大学大学院文学研究科紀要モノグラフ編、2018）として刊行された。
7. 科研費による共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学的」（2016〜2018 年度）は今年度一杯続いており、2018 年 8 月 13〜20 日に北京で開催された第 24 回世界哲学会議では、研究分担者と海外の研究協力者とともに、“The Phenomenology of Vulnerability: Birth, Aging, and Death”と “Trans-Cultural Phenomenology of Race”という二つのラウンドテーブルを担当し、8 月 25 日（土）には、Helen Ngo (Australia, Deakin University), Alia Al-Saji (Canada, McGill University)を招いて立教大学で研究会を行った。また、12 月には、Centre for Philosophical Anthropology in Minsk (Belarus), European Humanities University in Vilnius (Lithuania), Vytautas Magnus University and stay in Kaunas (Lithuania)の三箇所で研究発表をする予定である。来年度以降も、北欧諸国、東アジア諸国、カナダ、オーストラリアとの研究者たちとの学術交流を計画している。